

駐日アメリカ公使の書簡にみる一八六二年の 江戸・横浜

——ロバート・ヒューソン・プライン文書から(一)

吉崎 雅規

はじめに

本稿は、幕末期のアメリカ駐日公使ロバート・ヒューソン・プライン (Robert Hewson Pruyn) が本国の妻に書き送った私的な書簡等から、一八六二年(文久二年)の江戸・横浜の様相を描き出そうとするものである。

筆者は二〇〇九年(平成二十一年)九月にアメリカ合衆国ニューヨーク州オルバニー市 (Albany) のオルバニー歴史文化研究所 (Albany Institute of History & Art) において、同所が所蔵するロバート・ヒューソン・プラインに関する資料を調査した。オルバニーはプラインの故郷である。このロバート・ヒューソン・プライン文書 (Robert Hewson Pruyn Papers) は当時日本では内容が知られていなかった資料群であったため、筆者は「オルバニー歴史文化研究

所蔵駐日米公使プライン文書の日本関係資料」(『研究紀要』〈港区立港郷土資料館〉一二(二〇一〇年)として、その資料群の内容を全体的に報告した。同論文の発表と前後して、プライン文書の英文・和文資料の分析を部分的に進め、その成果の一部は吉崎雅規『幕末江戸と外国人』(同成社、二〇二〇年)等に活かることになった。その後、二〇二二年にスザンナ・フェスラー氏が、資料群のうち日本渡航期(一八六二―六五年)のプラインが妻に宛てた手紙の翻刻を成し遂げられ、Susanna Fessler, "The Letters of Robert Hewson Pruyn" (*East Asian Studies Faculty Scholarship* 19, 2022) として公開された。

この書簡全体の日本語訳がなされることが、幕末維新史の研究者、あるいは幕末史を愛好する一般読者にとって有意義なことと思われるが、プラインの筆まめさもあってその分量は膨大である。また手紙には、故郷オルバニーの知人に関する情報や、家族内のプライベ

トな事柄も少なからず含まれ、そのあたりは日本の読者には興味が薄い部分と思われた。そこで、本稿（連載）ではプラインの書簡から、幕末期（一八六二～六五年）の江戸・横浜の政治・社会・生活の様相がうかがえる記述を事項ごとに整理して訳出しつつ、どのような歴史的事実が明らかになるのか、あるいはどのような研究に資するのか、ということを検討していくことにした。くわえて、いくつかの事柄については日米の別の資料とも付き合わせながら、より正確な歴史像が詳らかになるよう試みた。

プラインは一八六五年四月まで日本に滞在して手紙を書き残しており、次回以降、一八六三年から六五年までの書簡についても同様に分析をおこなう予定である。⁽¹⁾なお、翻訳にあたっては、二〇〇九年にオルバニー歴史文化研究所で調査した原資料をもとにした箇所と、フェスラー氏の翻刻に拠った部分がある。また、引用史料中の（一）はプラインの手紙にもともと挿入されているもので、〔一〕内は吉崎が補った記述である。

プラインの略歴

史料の書き手、ロバート・ヒュートン・プラインについて紹介したい。⁽²⁾プラインは一八一五年二月一四日にオルバニーに生れた。父は Casparus F. Pruyn。母は Anne Hewson Pruyn⁽³⁾。一八三三年にラトガース大学 (Rutgers' College) を卒業し、一八三六年に弁護士となった。一八四一年から四六年までニューヨーク州知事ウイ

リアム・ヘンリー・スワード (William Henry Seward, 一八〇一～七二) のもとで軍法務部長 (Judge Advocate-General) をつとめる。一八四八年から五〇年までホイッグ党 (のち共和党) のニューヨーク州下院議員に選ばれ、一八五四年には下院議長に選出された。

一方で、プラインは家業であるオルバニー・アイアン・アンド・ソー・ワークス社 (Albany Iron and Saw Works) の経営にもかかわっている。⁽⁴⁾一八六二年版の "Albany Directory" によると、同社は蒸気機関・ボイラーを主に製造しており、"Robert H. Pruyn" と "Chas. B. Lansing" の名前が添えられている (代表者の意であろう)。⁽⁵⁾チャールズ・B・ランシング (Charles Bridgen Lansing, 一八〇九～九〇) はプラインの義兄にあたる人物である。プラインの企業経営者としての履歴は日本できざ知られていないが、彼の日本での行動を考えるうえで重要である。以上、プラインはもっぱらオルバニーにおいて法曹家・地方政治家・実業家としてキャリアを積んできた人物である。同時代の欧州の外交代表とは異なり、国際的な外交経験がない点、「異色」の外交官であった。

一八六一年一〇月一二日 (文久元年九月九日)、プラインはリンカーン大統領の国務長官となったスワードの推薦で弁理公使 (駐在公使、Minister Resident) に任命された。⁽⁶⁾プラインはこのころ南北戦争の影響で家業に借金を背負っており、駐日公使を請けた理由に彼自身の経済的な事情があることがすでに指摘されている。⁽⁷⁾プラインは次男ロバート (Robert Clarence, 通称バーティ "Bertie", 一八四七～一九三四) とともに、一八六二年四月二四日 (文久二年三月二六日) に江戸湾に到達。二五日午後には横浜に到着した。そし

て、四月三〇日（四月二日）、プラインは横浜から江戸に上陸、アメリカ公使館の善福寺に入った。

プラインは日本への赴任にあたり、国務長官スワードから、南北戦争下にあるアメリカの日本における国家的利益を低下させないよう、また在日西洋諸国の外交代表との親善関係を維持するように訓令を受けていた。⁽⁸⁾ プライン在任期の外交活動はおおむねこの訓令に則っておこなわれた。当該期の大きい外交的課題であった両都両港（兵庫・新潟・江戸・大坂）開市開港延期問題にあたり、欧米諸国はその代償として輸入品関税の軽減を幕府に要求するが、プラインはその実現の過程で指導的役割を果たした。⁽⁹⁾ また一八六三年六月（文久三年五月）、長州藩の下関外国艦船砲撃事件に対して他国代表と協調し、一八六四年九月（元治元年八月）の英米仏蘭四国連合艦隊下関砲撃に積極的に参加した。その外交活動は研究者のあいだでは一定の評価を得ている。⁽¹⁰⁾

一八六五年四月二八日（慶応元年四月四日）、プラインは横浜を発って帰国の途につき、同年秋にニューヨークの地を踏んだ。プラインはオルバニーに戻ったが、ジフテリアに侵され数年のあいだ諸活動から遠ざかることになった。一八七二年にニューヨーク州知事に誘われ、州の法律を改正するための無党派の委員をつとめる。その後はニューヨーク・メトロポリタン・トラスト社（Metropolitan Trust Company of New York）の理事、オルバニー・ナショナル・コマーシャル銀行（National Commercial Bank of Albany）の頭取などをつとめ、一八八二年二月二六日、オルバニーで死去した。六七歳だった。

プライン文書について

プライン一族はオルバニーでもっとも古いオランダ系のファミリーのひとつである。オルバニー歴史文化研究所ではプライン一族のうち法律家・政治家 John Van Schaick Lansing Prunyn とその六子 John V. L. Prunyn Jr. など、一族中の有力者の史料群であるプライン家文書（The Prunyn Family Papers, 1679～1978）を所蔵している。⁽¹¹⁾

駐日公使ロバート・H・プラインはジョン・V・L・プライン・ジュニアの再従兄弟にあたり、ロバートに関する文書群はプライン家文書とは別にロバート・ヒュースン・プライン文書（Robert Hewson Prunyn Papers, あるいは Robert Hewson Prunyn Collection とも呼称される。資料番号 CH532）として一括され、同所内 McKinney Library に所蔵されている。文書群には彼の六七年の全人生及び親族に関わる若干の資料が収められているが、彼の日本駐在期に関わる資料はプラインの関係文書全体の中で少なくない量を占めている。そのうち、日本滞在期に妻にあてた書簡（B2-F13～22, B3-F1～2, 一八六二年五月～一八六五年）は一六九点におよぶ。⁽¹²⁾ プラインの妻ジェーン・アン・ランシング・プライン（Jane Anne Lansing Prunyn, 通称ジェニー“Jennie”, 一八一～一八六）は Gerrit Yates Lansing の娘である。ランシング家もオルバニーにおける有力な旧家で、以前からプライン家と婚姻関係を結んでいた。

当該時期の日米の政治・外交関係については、プラインと国務長

官の公式な往復書簡が基本史料となるが、本書簡によってそれを補うこともできるだろう。⁽¹³⁾しかし、PLAINは政治外交的な事柄よりも、むしろみずからの体験した横浜・江戸の見聞や、社会生活について妻へ書き送っている。そして、そのことは幕末の横浜・江戸の都市の情景や社会像を豊かに再現するものと考えられる。

一 プラインの来日

江戸上陸

PLAINは一八六二年四月二五日（文久二年三月二七日）に横浜に到着し、四月三〇日（和暦四月二日）の水曜日に横浜から江戸に入った。PLAINが日本到着後、初めてジェニーに手紙を書いたのは五月三日（和暦四月五日）のことで、この手紙でPLAINは江戸に初めて上陸したときのように妻に伝えている。

横浜から江戸まで、PLAINは蒸気ヨット・エンペラー（Emperor）に搭乗して移動した。エンペラーは安政五年（一八五八）の日英修好通商条約の締結にあたって、イギリス女王から將軍への贈物ということで使節エルギン卿から幕府に贈呈されたものである。横浜から江戸までの海路、エンペラーはアメリカ国旗を掲げていた。

上陸地点では、大勢の役人（official）を従えた二名の外国奉行（Governors of Foreign Affairs）が私を迎えてくれました。私たちには乗物（horimon）〔駕籠〕がそれぞれ一台ずつ割り当

てられ、盛大な行列をなして公使館まで運ばれました。私の乗物は約七フィート〔約二メートル強〕の長さ、軽い木製で、故国の軽快な馬車（light carriage）のように側面に美しい裝飾が施されていました。これは四人の肩に担がれ、「担ぎ手は」頻繁に交代します。乗物は、中央部分を越えて「前後に」伸びる太い梁で支えられており、高位の人物の場合はアーチ型になっています。このこととその長さから、乗っている人の階級を推測することができます。また、場合によっては色から職業を推測できます。僧や医師のものは黒です。（一八六二年五月三日付書簡）

PLAINが公使館（麻布善福寺）に到着すると、前任者のタウンゼンド・ハリス（Townsend Harris）から「心からの歓迎」を受けました。その後、別の外国奉行がPLAINを迎える挨拶をおこなうために来訪し、日本語とオランダ語で書かれた贈り物のリストを手渡しました。贈り物は、アヒル一〇羽、玉葱数個、大根、慈姑、蜜柑だった。（五月三日付書簡）。

老中訪問

PLAINは將軍拝謁に先立っておこなわれた老中との会見の様子も描写している（五月九日付）。なかでも、このような儀礼的な場面でも供された食事の描写は目を惹く。PLAINの手紙では老中邸を訪問した日付は明確ではないが、スワード国務長官への報告（五月五日付）によれば、これは五月五日（文久二年四月七日）のこと

あった。⁽¹⁵⁾訪問先の老中は安藤対馬守信正あるいは久世大和守広周と考えられる。

私たちは宮殿 (palace) へと堂々たる行列を作って向かい、大君 (tycoon) 「將軍」の住まいに隣接する区画の中を通って、老中 (minister) の屋敷へと入りました。ハリス氏と私は、それぞれ長さ七フィートの乗物に乗り、ポートマン [Anton L. C. Portman, 通訳]、キップ [William Ingraham Kip, Jr., プラインの秘書]、バーティの諸氏は、大名が用いるそれより短い乗物に乗りました。私たちの護衛と従者は約二〇〇名であり、約一〇〇〇名が道に列をなしていました。宮殿に到着すると、私たちは従者の一人が運んできた履物 (pumps) をそれぞれ履き、建物の中に入りました。片側には一〇名の役人 (official)、外国奉行 (governors of cities) も兼ねる者たちが立っており、とても深々と頭を下げました。会場では、二名の若年寄 (member of the second council) とともに老中首座 (chief minister) が立っていました。部屋の片側には五脚の肘掛け椅子が並べられ、それぞれの前には漆塗りの机が置かれており、向かい側には日本人のために三脚の「椅子」がありました。ハリス氏と私が老中たちと握手を交わした後、私たちはそれらの席に着きました。(五月九日付書簡)

プラインとハリスが席につくと、それぞれの机に茶、蜜柑、無花果そして菓子が運ばれてきた。これらの軽食が片付けられると、有名な

な「粉末の茶」(powdered tea, 抹茶) がそれぞれの前に運ばれてきた。この日の抹茶は日本では一ポンドあたり八ドルするものであったという。そして、プラインたちは、「濃く点てられた状態で供された抹茶を喫したのである。

その後、膳が運ばれてきた。内容は茹でた海老、薩摩芋の小菓子、そしてポロニア・ソーセージの輪切りのように整形された鴨肉である。鴨肉の中には豆の調味品が詰められており、見た目は「ボーン・ターキー」(boned turkey, 骨なしの七面鳥) のようで、なかなかの美味だったという。そして、鯛 (tad) が運ばれた。プラインは鯛を日本のロイヤル・フィッシュ (royal fish) と評し、アメリカのシープスヘッド (sheepshead) に似ていると観察した。鯛は「その自然の色である赤さを損なわないようにうまく調理されており、骨はすべて取り除かれて」いたという。加えてスープ (汁物) の碗があり、銀のフォークとナイフも添えられていた。小さい膳には甘さを加えた酒 (sake) と普通の酒のふたつのデキャンタと、ふたつのワイングラスが載っていた。

用件がすべて済むと、ハリスへの贈り物が運び込まれ、プラインたちは日本側の老中たちと和やかに談笑した。会話は「ポートマン氏がオランダ語に訳し、日本側の通訳がそれをさらに日本語へと訳して伝えます」と、オランダ語を介しておこなわれた。日本側のふたりの通訳は日米の席の中間におり、老中の前に膝をついてひかえていた。老中たちは息子のバーティを気に入ったようで、とてもかっこいいと言ってくれたという。そして、次席老中 (second minister) は、バーティの年齢やプラインの家族構成などを尋ねた。

ひとしきりの会話が終わると、プライン・ハリスらは老中と握手を交わし、さらに一〇名の奉行たちとも握手をした。奉行たちは着席していたものの、軽食のもてなしは受けていなかった。

プラインは妻にはその用件を記していないが、この日の老中全見で、將軍徳川家茂に信任状を捧呈するための日取りの打ち合わせがあり、「速やかに決定する」旨が伝えられたという。プラインは老中たちの対応を「誠実な態度」と評価し、それが前任者（ハリス）の「築き上げた友好関係」によるものと、スワードに報告したのである。⁽¹⁶⁾

將軍拝謁

プラインは一八六二年五月一七日（文久二年四月一九日）に將軍徳川家茂に拝謁し、信任状を捧呈した。このことについて、プラインは妻に事細かに情景を書き送った（五月二三日付書簡）。幕末の駐日外交官による將軍謁見については、近年外交儀礼の視点から検討が進んでいる。⁽¹⁷⁾ 手紙の記述は外交儀礼の研究史料としても貴重であろう。

この日朝八時にプラインたちは江戸城へ出発した。「宮殿」は公使館から徒歩で一時間の距離である。まず、外国奉行の一人が乗物で先導する。その後ろには随行する役人一行が付き従っている。次に大型で絹製の新しい米国旗が、そして七フィートの乗物に乗ったプライン自身が続き、キップ、フィッシャー（George S. Fisher、米国神奈川領事）、バーティー、ポートマンが、それぞれ乗物に乗って後を追った。行列の前後左右には従者たちが控え、その脇を二本差しの護衛たちが固めていた。護衛も従者もみな、合衆国の

翼を広げた大鷲の刺繍が施された上着を身にとっていた。くわえて、三〇〇名の役人（yakunin）が配置されていた（プラインは“yakunin”が“officer”を意味すると註記する）。沿道には地区の士官（officer、町役人か）や兵士が向かい合って警備にあたっていた。「私たちが町〔名主の受け持ち区域〕に入るたびに、二人の名主が次の門〔木戸〕まで同行した。彼らは地面を杖で突いて歩くのだが、その杖の先端には鉄の輪が取り付けられており、鋭くも不快ではない音を響かせていた」（五月二三日付書簡）。

プラインが宮殿に到着すると、一行は駕籠から降りた。従者に履物を履かせてもらってから中に入ると、二、三〇名ほどの外国奉行や勘定奉行（Governors of Treasury）らに迎えられた。プラインは彼らに一礼し、椅子の用意のある美しい部屋に案内され、そこで茶が振る舞われた。

ここから私はキップ氏と別の部屋へと進みました。そこで少しばかり待機した後、私たちは大名たち（Daimios）が着座している「千畳の間」（room of a thousand mats）〔大広間〕を通り抜け、直角に曲がって、小さい三つの小部屋が続く間に入りました。三番目の部屋の正面には、大君（Tycoon）〔將軍〕が一種の玉座に座っていました。その傍らには数名の護衛が平伏しており、二番目の部屋には老中（Gorogio）ら八名の高官が平伏しています。私は一畳の幅が三フィート〔約九〇センチメートル〕ある畳の二枚目まで進み、一礼しました。続いて四枚目で一礼、さらに七枚目で一礼します。その間、外国奉行の

一人が私の傍らで膝をついていました。そこで私は演説を行い、大君が返答を述べました。次にキップ氏が私と同様に一礼しながら進み出て、絹で包まれた大統領親書を私に手渡ししました。私はそれを受け取り、頭上に掲げてから一礼し、平伏している奉行へと渡しました。その後、大君に一礼し、四枚目、二枚目の畳へと後退しながらそれぞれ一礼して、謁見は終了しました。私は最初に入った二番目の部屋へと導かれ、そこから再び「千畳の間」へと向かいました。そこで老中たちが私を迎え、謁見が満足のいくものであったかどうか、言葉をかけてきました。私たちは互いに厳かに一礼し、別方向へ向き直った後にもう一度礼を交わして、行事はすべて終了したのです。(五月三日付書簡)

ブラインは礼をする位置まで正確に記録しているが、部屋の入口からの距離、あるいは將軍との距離は、外交官を遇する外交儀礼上、重要な要素であった。イギリス公使オールコックの場合は、この位置をめぐって幕府側とのトラブルを生じている。しかし、ブラインはこの信任状捧呈の外交儀礼について、礼式が満足すべきものであったことを本国に報告した⁽¹⁸⁾。拝謁は滞りなく終了したのである。

二 江戸の公使館と生活

公使館善福寺

ブラインが江戸で公使館としたのは、麻布の善福寺(浄土真宗)である。その開創は天長元年(八二四)。江戸時代の境内は一万七七〇坪で、一三の子院を抱える江戸でも有数の大寺院であった。前任(初代)公使のタウンゼンド・ハリスが善福寺に入ったのは安政六年(一八五九)六月八日で、本堂の北側の庫裏に公使館が置かれた。庫裏とは僧侶の住居や厨房のことだが、善福寺の庫裏は御殿のような立派な体裁の建物であった。ブラインも日記の記載から考えると、引き続き庫裏を公使館として使用したようである⁽¹⁹⁾。さて、ブラインは善福寺について次のような観察をしている。

私たちが占有している寺は、日本中で有名です。そこは神聖な場所です、決して侵入されるようなことはありません。その名前は善福寺(Zenpukuge)で、真なる幸福の寺(True Happiness)という意味です。寺の名前の最後には必ず「シ」(gi)がつき、実際に寺という意味です。住職は天皇(Mikado)の高官(high officer)の末裔で、この寺は彼から拝領したものです。一日に二枚の天保銭(tempo)〔天保通宝、一枚一〇〇文〕もあれば一人が容易に暮らしていただけるこの国において、この寺の収入は相当な額にのぼります。私はポートマン氏から、ある帳簿係(bookkeeper)の男が、五〇枚の一分銀(itzabu)

という年収で家賃を払い、妻と三人の子供を養っている、と聞きました。(五月二三日付書簡)

善福寺は江戸の古刹として名高い寺であった。歴代の住職は皇室・公家と関係が深く、安政五年(一八五八)十一月、一四代將軍徳川家茂の將軍宣下祝賀のために参府した近衛大納言忠房は善福寺を旅館としている(庫裏に滞在した)²⁰。そのような格式高い寺に勤める僧は、相当の収入を得ていたようである。

また、善福寺の庭園についても描写がある。プラインの食堂は庭に面しており、庭の池には一五〇尾の金魚(gold fish)が泳いでいた。庭園には、撫子、生苺、芥子、金柑が生っており、樹木として杉、桜、樅などが見られた。また、善福寺の敷地内の他の植生として、ミルトス(銀梅花)に楓、松、梅、椿、そしてピスタチオ(栢木)、竹や柘植などを挙げている。とくに、柘植は「まるでエパーン(epergne)〔食卓用の装飾台〕のような形に刈り込まれています」と観察し、「岩の間には躑躅などの花々が混じり合い、見事な景觀を形作っています」と、その素晴らしい庭園の景觀を賞賛した(五月二三日付書簡)。善福寺の庭園については、外国人カメラマンが撮影している例もあり、なかなか見事なものだったようである。

善福寺の警備

プラインは善福寺の警備体制についても、詳しい觀察をおこなっている。外国公館の警備は幕府にとって大きな課題であった。とくにヒュースケン暗殺事件(一八六一年一月一日・万延元年十二月

五日)以降、英仏は江戸の外国人警備強化を求める。そのため、幕府は外国公館に厳重な警備体制を敷いていた。

公使館は厳重に警備されています。通りから並木道に沿って四つの番所があり、敷地の周囲には二列の竹柵が設けられています。その間に約一五〇名の兵士が小さな番所を構え、そこで食事や睡眠をとり、昼夜を問わず警備に当たっています。(五月九日付書簡)

境内の入り口から家の玄関までの間には六つの番所があり、さらに小さな寺〔善福寺の子院〕には政府の吏僚(government officers)用の事務所と役人(yakunin)〔ここでは外国御用出役のことか〕の本部があります。目印のない者、用件の不明な者は誰も入ることができません。私たちの訪問客と公用で私たちが呼んだ者以外は、家〔善福寺〕から排除するという規則があるため、持ち主である寺の僧でさえ正面玄関から入ることはできません。彼がハリス氏に別れを告げようとした際、ハリス氏の特別な要請により政府から立ち入りを許可され、政府から正式な指令が出されました。護衛(guard)は、二本差(two-sworded men)で「守」(kani)もしくは騎士(knights)の子弟である役人(yakunin)と、一般の兵士である侍(samurai)で構成されています。前者は將軍(Tycoon)に、後者は大名(Daimio)に雇われており、そのうち数人がこの護衛の補充を担当しています。(五月二三日付書簡)

江戸の外国公館の警備体制は時期によって異なるが、プラインの在任期には、幕臣の子弟からなる外国御用出役（文久三年九月一三日に別手組と改称）と、指定された大名による警備がおこなわれていた。プラインもこのことを認識していたようであるが、外国御用出役を「役人」と考え、「侍」を大名家臣とするなど、着任間もないこの時点では、警備陣・武家に関する用語・認識にやや誤りがあったようである。日本側の記録（文久三年）によれば、外国公使が寺院に滞在している場合、別手組の警備人員は一〇〇名程度であった。²²

外出時の様相

プラインは、善福寺から江戸やその郊外に馬に乗って外出することがあった。プラインが来日した一八六二年は攘夷思想が高揚していた時期で、幕末期のなかでも治安情勢が特段に悪かった。そのため、外国人の外出・遊歩には危険がともなった。しかし、プラインはその危険についてはさほど触れず、外出時の様相を次のように描写している。

私たちが馬で出かける際は、二・八名の役人（yakunin）が同行し、さらにその前方には二・二名の別当（betto）が先導します。彼らは鹿のように〔行列の〕前方を走り、必要に応じて道をあけるよう声を張り上げます。騎馬の者も徒歩の者も皆、目上の者が通る前に脇に寄って控えます。私たちの役人たちは、

もちろん二本差しの侍たちです。彼らはひじょうに礼儀正しく、細やかに気を配ってくれます。（五月九日付書簡）

天気の良い平日はいつも馬で出かけるのですが、その一行は一見の価値がある「大名行列」（cavalade）です。例を挙げましょう。私が厩舎へ使いを出し、私自身とバーティ、キップ氏、ポートマン、そして客人のフィッシャー氏の分の馬を用意させるよう伝えます。言うのはそれだけです。いざ出発です。そこには長い馬の列ができています。護衛の面々です。私たちが先頭を切って進むと、私たちのすぐ先、馬の足元と言ってもよいほど近いところに別当たちがあらわれます。彼らは日本特有の、実に風変わりな人々です。私たちの馬にはそれぞれ一人の別当がつき、さらに護衛たちのために一七人の別当が控えています。日本で馬を雇う際は、必ず別当も含まれています。こちらがどれほど速く走らせようと、彼らについてくるのです。私は横浜までの二〇マイルを、彼らとともに一度しか休憩せずに走り抜いたことがありました。さあ、出発です。まず道をあけるために叫び声をあげる別当たちが先行し、次に二名の役人、続いて私と同行者たち、その後三〇名の役人が続きます。〔中略〕五名のアメリカ人と三二名の騎乗した役人、そして馬と同じくらい足の速い二一人の別当。役人たちは常に一列縦隊で進むため、かなりの長さの行列になっているのがお分かりいただけるでしょう。（五月二三日付書簡）

プラインは、自分たちに大げさなくらい多数の護衛の役人がついたことを、「大名行列」と皮肉っている。とともに、自分が安全な保護のもと外出を楽しんでいることを、妻に伝えたかったのである。また、乗馬に同行する別当（厩務員）の振る舞いを日本特有のものと考えて、その所作を詳細に観察しているのも興味深い。

江戸の地形と自然

プラインは江戸の諸所を馬に乗って散策し、その感想を妻に伝えている。そのうち、江戸を全体的に捉えている記述をいくつか紹介したい。

プラインたちは、江戸に到着早々「江戸の溢れる緑の小道や野原」の散歩を楽しんだ。江戸の道を進むと「庭園・寺院・野原」が交互にあらわれ、また耕作地や森も見ることができた（五月九日付書簡）。このような緑豊かな江戸について、プラインは「江戸はあなたが今まで想像したことのないような場所です。そこは、都市というよりもむしろ、家々が立ち並ぶ田舎（a country filled with houses）です」（五月九日付書簡）と妻に伝え、あるいは、「この国について、あなたに適切なイメージをお伝えすることはできません。江戸は世界のどの都市とも違います。オルバーニー郡（county of Albany）全体よりも多くの木々があり、大きな樹木もたくさんあります」（五月二三日付書簡）と、江戸をうまく形容できないこともあった。いずれにせよ、プラインは江戸を「都市」と「田舎」が混在する不思議な都市と捉えていた。江戸の面積の七割を占める大名屋敷には、その広い敷地に多くの植生があり、市街地はいつの間にか自然豊かな

な郊外に続く。その景観は、世界のどの都市にもたとえられないユニークな姿に見えたのである。

そして、江戸の地形的特徴についてもプラインは次のように指摘する。

江戸〔の市中〕でさえ、地形はひじょうに起伏に富んでいます。先ほどお話しした広大な市街地の一部は、湾を埋め立てて作られたものです。それ以外の方向に目を向けると、数多くの丘に遮られて視界はひじょうに限られています。それらの丘の上には、例外なく寺院や大名（Daimio）の屋敷が建っており、これまた例外なく巨大な木々に覆われています。（五月九日付書簡）

この都市は驚くべき起伏の街です。丘は、ひな壇状になったり、神社や寺院のために斜面に切り込まれた場所があったりしますが、決して切り崩されることはありません。しかし、街路は〔坂を〕上ったり下ったりしながら何マイルも伸びています。（七月一二日付書簡）

このように、江戸は起伏に富んでいながら、その地形を生かして人々の生活空間がひろがっていることに、プラインは驚きの眼を向けている。

さらに郊外の自然について、プラインは次のように記す。

ハリス氏は、主に郊外へと私たちを連れて行ってくれました。そこには静かな木陰道があり、あたかも小さな田舎の集落であるかのように鄙びた場所もありましたが、それでも、周囲の丘谷、野原のいたるところに人々がいるのです。どんな小さな土地も利用されています。ある木が切り倒されると、ほぼ例外なくまた木が植えられます。その結果、私が見た限りでは、この島〔日本〕はどこに目を配つてもひじょうに美しい樹木で覆われています。土地の半分は森林であるかのように見えます。木々は巨大な高さまで成長しています。(五月九日付書簡)

プラインはこのように自然にあふれた江戸の光景について、ついには神がアダムとイブのために作った楽園であるエデンになぞらえた。

今日、屋外では椿 (Japonica) が咲き、薔薇や菊、そして緑の野原や木々がいたるところにあります。ここは楽園であり、完璧な庭園です。もし私たちの最初の親〔アダムとイブ〕が呪いを受けた際、エデンがこの地に位置していなかったのだとすれば、この原始の故郷〔エデン〕の美しさはすべて、この地球の最果ての島〔日本〕へと移されたに違いありません。

(二月三〇日付書簡)

ところで、プラインは江戸と日本の人口についても情報を集めているが、確実な情報は得られなかったようである。しかし、まずハリスから、「ハリス氏は、都市全体の人口を二〇〇万人、帝国全

体の人口を四〇〇〇万人から六〇〇〇万人と推定しています」(五月九日付書簡)との情報を聞き、さらに、「人口については様々な意見があります。江戸の人口を四〇〇万人とする人もいますが、一〇〇万人を下回することはありません。この帝国〔の人口〕は六〇〇〇万人〔との意見もあるが〕、三〇〇〇万人から三五〇〇万人を下回ることはありません」(七月二日付書簡)との推定も伝えている。

御殿山のアメリカ公使館

御殿山の外国公使館の予定地の様相を記しているのも興味深い。

幕府は江戸の外国公館が寺院に散在していたことから、その公館を一ヶ所にまとめることを企図。その用地として品川宿付近の御殿山を選定し、一部公使館の建設を開始する。しかし、文久二年一二月一二日、長州藩士高杉晋作・伊藤博文・井上馨らがそのイギリス公使館部分に放火し、同館は焼亡。その後、御殿山を公使館用地として使用する計画は白紙となった。実際に使用されることのなかった御殿山についての情報は乏しいため、プラインの手紙の記載は重要な証言となる。⁽²³⁾

三日目、私たちは〔各国の〕公使館が設置される予定の横浜〔誤り〕へと馬で向かいました。入り江に面した湾を見渡す高台にあり、〔品川宿から〕見上げた右側が四エーカー〔約一万六〇〇〇平方メートル〕のアメリカの敷地です。左側がイギリス、その後方がフランスです。アメリカの敷地の後方

がオランダ公使館となっています。これら四つの敷地の間には約六〇エーカーの庭園があり、ひな壇状に造成され、池が配置されています。これは四つの公使館すべてに共通の遊歩庭園 (pleasure grounds) となる予定です。場所はひじょうに美しく、敷地は最高のスタイルで設計されつつあります。イギリスはすでに三万ドルの費用をかけて建物を建設中です。彼らは一〇エーカーを使用する予定です。敷地全体は、江戸の郊外で高位の大名が用いているような防護柵 (palisade) で囲まれており、その外側には深い空堀があります。現在は堀の外側の土手に生け垣が植えられており、内側の土手にももう一つの生け垣が作られることになっています。(五月九日付書簡)

プラインは御殿山のアメリカ公使館の建物のプランを妻に送付し、五月九日と五月二六日の書簡(五月二六日書簡の宛先は My Dear Wife, Sister, and Brother) でその建物の内部構造について記している。⁽²⁴⁾ ただし、ふたつの書簡の記述には重複と差異があるので、情報を整理して紹介する。

プラインはメインの棟を五四×六三フィート(二六日付書簡では七二フィートと記す)で造作することを考え、そこにはホール(二八フィートの幅、ダイニングルーム、応接室、オフィス、寝室(四部屋)やクローゼット、パントリーが配されていた。もうひとつの建物には居間 (sitting room) と寝室があり、三つ目は台所と雇用人のための建物だった。各棟は本館から二〇フィート離れて

おり、屋根付きのベランダで結ばれる。その費用をプラインは四、五〇〇〇ドルと見積もった。家賃は六〇〇ドル、地代は二〇〇ドルという。

御殿山のアメリカ公使館の敷地は見晴らしがよかった。「私たちの敷地からは、二〇マイル離れた横浜港に入港する船を見ることが出来ます。五つの港を見渡すことができ、ひじょうに美しい立地です」(五月二六日付書簡)。プラインは「スー」(ジェニーの妹 Susan Yates Lansing) とジェニー、小さなチャリー「プラインとジェニーの末子 Charles Lansing Pryn. (愛称 Charlie)」そして運動に來る他の子供たちにとって美しい公園になるでしょうし、みんなに小さなポニーを飼わせることもできます。「冗談ではありません」(五月二六日付書簡) と語ったが、親族が来日することはなく、また御殿山が外国公使館として使用されることもなかった。

雇用人と通訳

プラインは公使館で雇っていた日本人・中国人の雇用人についても記している。このような情報が判明するのは貴重であり、ここで紹介しておきたい。

私の世帯 (household) 「公使館」は一四人の雇用人で構成されており、そのうちの二人、料理人と洗濯係は中国人でした。彼らはハリス氏のもとで六年間働いており、帰国することを切望していたのです。賃金はそれぞれ月に二〇ドルと一四ドルでした。二人の日本人雇用人は、月に八枚の一分銀 (izabahn)

「三〇ドル近く」を得ています。私は日本人の洗濯助手を、中国人洗濯係の後釜としたので、月々の賃金を一〇ドル削減できるでしょう。また、腕の良い日本人料理人もほぼ確保できそうです。もし彼が期待に応えられるのなら、さらに少なくとも同額「一〇ドル」か、おそらく一五ドルほど賃金リストから差し引くことができるでしょう。もともと、しばらくの間は彼にさらなる「料理の」指導を行うため、中国人を雇い続ける必要があるかもしれません。（五月九日付書簡）

使用人の給与はプラインの俸給から支払われていたようである。そのため、プラインはその給与を削減することを重視していた。そして、使用人の名前と月給を、プラインは五月二三日付書簡に書き上げている。それを若干体裁を整理して紹介する。

タキノウ (Takiso) [滝蔵]	執事 (butler)	一六 [枚の] 一分銀
スコロウ (Skoro)	給仕 (waiter)	八 [枚の] 一分銀
キンサブロウ (Kingsaboro) [金三郎?]	給仕 (waiter)	五 [枚の] 一分銀
シンジロウ (Sinjiro) [新次郎?]	料理人 (cook)	一二 [枚の] 一分銀
カニキチ (Kanikitshi) [兼吉?]	助手 (assistant)	六 [枚の] 一分銀

ヒロキチ (Hirokitshi) [広吉?]

仕立屋 (tailor)

タンキチ (Tankitshi)

洗濯係 (washman)

マツロウ (Matsuro) [松郎?]

八 [枚の] 一分銀

コースケ (Kookay) [幸助?]

助手 (assistant)

ヒキチ (Hikitshi)

五 [枚の] 一分銀

ヨヘイ (Yohen) [与平?]

浴室係 (bathrooms)

水汲み係 (waterman)

別当 (betos) 二名

四 [枚の] 一分銀

髪結い (barber)

買付係 (comprador)

八 [枚の] 一分銀

全員の髪を整え、身だしなみを保つために毎月支払う

三 [枚の] 一分銀

これらを総計すると一〇九枚の一分銀、ドルに換算すると毎月三六・一／三ドルの出費となった（五月二三日付書簡）。それを年間で換算すると、四三六ドルである（五月二六日付書簡）。また、ハリスは「自分が騙されている」と知りながら、支出について二五%

の上乗せを容認していたが、プラインはそのようなことをさせない
と買付係 (comprador) に伝え、週ごとに精算をおこない、通訳の
ポートマンを通じてかかる慣行を改めてさせていた (五月三日付
書簡)。

なお、使用人の冒頭に執事として出てくる Taliso は村山滝蔵の
ことと思われる。ハリスが江戸着任以前に駐在していた下田の領事
館時代からハリスの使用人として働いていた人物で、プラインの帰
国に同行して渡米、日本に戻った後も引き続き江戸・東京のメリ
カ公使館に勤務している。滝蔵とともに西山助蔵という下田の少年
も善福寺に移り、四代の公使に仕えている。²⁶⁾ Skoro が助蔵を指すの
かもしれないが、どうだろうか。

服の仕立てを担当するヒロキチは、ハリスのために良い帽子 (cap)
を作り、ポートマンには、フランネルのスーツ (flannel suit) を裁
断して作った。ハリスはボタンなしのズボン・シャツ・ジャケット
も作らせており、その留め具には象牙あるいは木製のものを使っ
ていたという。プラインもアメリカ製の綿の綾織り生地 (cotton
twill) を購入して、ズボンを仕立ててもらったことを考えていた (五
月九日付書簡)。

日本における洋裁の「もののはじめ」として、横浜ではアメリカ
人宣教師が滞在した寺院で働いた足袋職人が洋服屋に転じた例など
が知られているが、²⁶⁾江戸では、外国公館において洋裁が日本人に伝
播していったのである。西洋の生活文化が日本に摂取されていく過
程が垣間見える。

くわえて、プラインは通訳のトミー (Tommy, 立石斧次郎) につ

いても触れている箇所があるので、ここで紹介しておきたい。立石
斧次郎は万延元年遣米使節に通詞見習として参加、その屈託のない
振る舞いがアメリカ人の人気を呼んだ少年である。²⁷⁾ 帰国後は善福寺
のアメリカ公使館でさらに英語の修行を積んでいた。

斧次郎 (Onigero) は、プラインが公使館として使用していた庫
裏に続く建物に起居していた。そこには斧次郎以外にも二名の通訳
生 (student interpreter) がおり、さらには公使館の諸事をおこな
う日本人の使用人もこの建物にいた (五月三日付書簡)。プライ
ンはその斧次郎の人柄について、次のように記している。

あなたは前の手紙の中で、あの過剰なほど称賛され、そしてか
なりひどく中傷された少年トミーについて触れ、彼が私の家〔善
福寺〕にいたことを残念がっていましたね。政府が一度彼を
連れ去ったものの、ハリス氏の助言を受けて、私が彼を呼び
戻させたことを伝え忘れていました。彼は静かでおとなしい、
とても勉強熱心な少年です。ワインやアルコールを一滴も飲
みませんし、誰に対してもこの上なく無害で穏やかです。異
教徒 (heathen) としてはこれ以上望めないほど良い人間です。
彼は、「遠ざかっていることがその光景に魅力をあたえるわけ
ではない」〔近くで接してみると悪評とは異なる良い面が見え
る〕²⁸⁾ というひとつの事例です。(二月三〇日付書簡)

幕末の通訳として有名な立石斧次郎の人物評として興味深い。な
お、斧次郎はプラインの離日時、真情のこもった英文の手紙をプ

ラインに書いており、ふたりの関係性がうかがわれる⁽²⁹⁾

貨幣の交換

幕末の外国人が、日本と外国の金銀比価の違いを利用して、洋銀を日本の金貨と交換し、それを海外に持ち出して多大な利益を得ていたことは、概説的によく知られている事柄だろう。しかし、外国公使にはまた別の「鍊金術」があったことが、プラインの手紙から見えてくる。

プラインは一八六二年五月一日付書簡で、ハリスがその在任期間に相当な額を蓄財したことを記している。

ハリス氏は、内密に私にその数字を見せてくれましたが、三万ドル以上も蓄財していました。彼の〔在任〕期間の大部分、給与はわずか五〇〇〇ドル―この額で四年間、残りの二年間は私と同じ額―でした。彼は、私なら年間一万一〇〇〇ドルは蓄えられると言っています。(五月一日付書簡)

そして、プラインはみずからについては次のような蓄財が図れるだろうと見込んだのである。

これを実現するために、私は送金用の為替 (exchange for remittances) を次のように購入しています。

俸給 (Salary)

七、五〇〇ドル

一分銀 (titzabu) への両替による利益

四、〇〇〇ドル

一一、五〇〇ドル

公使館の維持費 (household expenses)

を差し引く

三、〇〇〇ドル

八、五〇〇ドル

送金用為替の購入利益三〇%

二、五五〇ドル

一一、〇五〇ドル

(五月一日付書簡)

プラインの公使としての俸給は七五〇〇ドルだったが、一分銀への両替によって二万二五〇〇ドルにもなったのである。そして、公使館の維持費 (雇用人への給与など) を差し引いても、最終的には一万一〇五〇ドルを得ることができたことになる。このからくりを、プラインは妻に次のように説明している。

一分銀による利益とはどういう意味か、これから説明しましょう。これはドルの約三分の一の重さがある硬貨で、一〇〇ドルに対して三二一枚と〔条約で規定〕され、そこから改鑄費 (coinage) 四 % が差し引かれます。しかし、政府はこの条約上のレートでの需要を満たすほど十分に〔硬貨を〕持っていない。そのため、一メキシコドルではそれに見合う額にはなりません。一〇〇ドルで手に入るのは平均二三七枚の一分銀です。

日本政府は公職者 (public officers) に対して「一分銀両替枠を特別に」供給しており、私の割り当て分は月に一五〇〇ドルです (ここから、通訳への支払いに充てる二五〇ドルほどを差し引く必要があるかもしれません)。私はこの一五〇〇ドルに対して、改鋳費四%の六〇ドルを支払うことで、四六六六枚の一分銀を受け取ります。これらの一分銀を自分で使う場合、物価はこの貨幣「二分銀」によって規定されているため、ひじょうに有利に買い物ができることがわかるでしょう。例えば、ある品物の価格が一ドル二三枚の一分銀、とすると、私の実質的な支払額は一〇〇分の二三・七ドル分で済むのです。自分で使い切れない分は、市場レート (market rate) で売却してもらいます。各公使館はこのレートでの「両替が」認められており、軍艦の士官は一日三ドル、兵員は一日一ドルまでの両替が可能です。このような状況に対しての唯一の言い訳は、日本政府にはこれ以上の対応能力がない、ということです。この通貨問題がより貿易商たちにとって有利な形で早期に解決されるよう取り計らうことが私の義務であり、私はそれを実行するつもりです。(五月二一日付書簡)

日米修好通商条約によって、外国の貨幣 (金貨・銀貨) は、同じ重量の日本の同種の貨幣 (金貨・銀貨) として通用すると定められた。一メキシコドルの場合は一分銀三枚 (三一一枚) として通用する、というのが公定レートである。しかしプラインによれば、市場では一ドルにつき二三七枚の一分銀しか手に入らなかったとい

う。ところが、公使であるプラインは、特別に公定レート (一〇〇ドル二三一枚の一分銀) で、日本の一分銀を入手することができた。外国公使には高額な両替枠があり、プラインは月に四六六六枚 (四六六五枚の誤か) の一分銀を得ることが可能だったのである。そして、それをまた市場レートでドルに両替することによって、プラインは公使としての俸給よりも多くの収入を得ていた。ただし、文中の「実質的な支払額は一〇〇分の二三・七ドル」との説明はわかりにくい。おそらくは公定レートと市場レートの差異を利用して、三割ほど (改鋳費を考慮しなければ、一〇〇ドルが一三・一ドルになる) 利益を得られることを説明しようとしたものだろうか。

三 横浜の外国人社会

宣教師

プラインの手紙からは、横浜・神奈川の宣教師の活動実態が垣間見えるのも関心をそそる。アメリカからは一八五九年 (安政六年) 一〇月一八日、長老派教会の宣教師・医師のジェームズ・カーチス・ヘボン (James Curtis Hepburn) が来浜し、神奈川宿の成仏寺に居をかまえていた。続いて一一月にはオランダ改革派の宣教師サミュエル・R・ブラウン (Samuel Robbins Brown) が、一八六〇年 (万延元年) 四月一日にはバプテスト派の宣教師ジョナサン・ゴープル (Jonathan Goble) 夫妻が到着した。かれらも成仏寺に滞在して施療活動をおこなうとともに、ときには横浜の外国人ために説教や儀

式をおこなった。ヘボンは一八六二年二月二十九日（文久二年一月九日）に横浜の居留地三九番地に転居するから、本稿の対象とする一八六二年はおおむね神奈川宿で活動していたわけである。³⁰⁾

日本に到着して間もない五月一日付書簡では、次のように神奈川（横浜）にいる宣教師の名前を挙げている。

私たちがここに来て最初の安息日に、イギリス領事館でブラウン氏の「イエスの」復活の説教を聞きました。聴衆は八〇名ほどで、なかなかの人数でした。今朝も彼の説教を聞けるかもしれません。もつとも、もう一人の宣教師バラ氏（James H. Ballagh）が当地にいますし、アモイから来た宣教師のオストロム氏（Alvin Ostrom）も奥様の病気のため、そして長老派教会の宣教師キーフ氏（Mr. Keefe）も体調を崩しているためここにいます。イギリスではマデイラ島に送られるのと同じように、中国からは患者がここに送られてきており、ブラウン氏にとってはかなりの負担になっているに違いありません。彼らのうちの誰かが説教をするかもしれません。（五月一日付書簡）

イギリス領事館においてプロテスタントの説教がおこなわれていたこと、そしてその聴衆の人数などがわかる点、横浜における初期の宣教師の活動の様子が判明し興味深い。のみならず、中国からの「保養地」として、横浜に宣教師が送られてきている点も、横浜の東アジアにおける性格・位置づけを考えるうえで重要だろう。マ

デイラ島とはリスボンの南西一〇〇〇キロの大西洋上に位置する温暖な島（ポルトガル領）であるが、一九世紀にはイギリスからの結核患者が送り込まれるなど、療養地・保養地として名高かった。横浜も中国沿岸の開港都市と比較して、気候的に穏やかな条件をもっていた。そのため、中国で健康を害した英仏軍の兵士たちが、保養のため横浜に送られていたことは、すでに先行研究で指摘されている。³¹⁾しかし、宣教師についても同様の実態があったのである。あるいは一般の商人たちのあいだにも、横浜をのように利用していた者があつたかもしれない。貿易・軍事・宣教のほか、療養を目的として横浜に滞在する外国人がいたことには留意する必要がある。

さて、PLAINはハリス、息子のバーティーとともに、横浜居留地から「湾を渡って」神奈川へ赴き、ブラウン一家とヘボンに会っている。そして、彼らが寺院に住み、「立派な住居と庭園を持つて」いることを記した（五月一日付書簡）。PLAINは毎月第一安息日に自宅（成仏寺）で聖餐式を開いていたという（五月二三日付書簡）。PLAINは「私は神奈川にある図書館のために、安息日学校（Sabbath School）用の本を寄付しました。PLAIN氏によると、子どもたちはそれらの本を大変喜んでいるとのことです」（七月二四日付書簡）と、彼らに寄付もおこなっている。

五月二三日付書簡では、PLAINが日本到着以降、横浜の教会に二日しか来れていないことを書き送っている。夜七時までは江戸に帰ることをメドとしていたPLAINにとって、江戸から横浜まで「往復するのは遠すぎた」のである。しかし、PLAINはできる限り教会に行くことを望んでいた。そして、息子バーティーにも、「彼

が神に心を捧げるには若すぎるわけではないことを伝えました。この異教の地において、常に聖なる慰め主である神の霊が彼の心に触れ、神への奉仕に人生を捧げるよう導いてくださいますように」(五月三日付書簡)と願った。ブラインは敬虔なプロテスタントだったのである。

江の島への小旅行

横浜に在留する外国人は、横浜から十里四方(ただし北は六郷川が境界線)の遊歩が許されており、その範囲内で旅行を楽しむことがあった。ことに、鎌倉や江の島はその恰好の目的地となった。

ブラインも江の島への小旅行をおこなっており、一八六二年七月一二日付の書簡に詳細が記されている。この日の手紙に旅行の日付は記されないが、曜日が「水曜日」とあること、七月八日付書簡に「明日は江の島(Onesima)に遠出をするつもりです」と書かれていること、またこの小旅行に同道したフランシス・ホール(Francis Hall)の日記の記述から、七月九日(水曜日、文久二年六月十三日)の出来事と確定できる。⁽³²⁾

旅行は二三名からなる一大パーティーだった。一行にはブrawn牧師、オストロム牧師、ブラウン家のアドリアナ嬢(Miss Adriana)、フィッシャー夫妻、マン嬢(Miss Mann)、宣教師・医師のシモンズ博士(Duane B. Simmons)夫妻らが含まれていた。ホールの日記によれば、二三名は全員アメリカ人で、護衛・別当・従者などを含め七〇〇八〇名の一団になったという。彼らは朝出発し、舟(ボート)でウェブスター島(Webster's Island, 夏島)近

くの漁村・金沢(八景)に到着した。そこから馬で鎌倉に入り、さらに海岸沿いを進んで江の島を目指した。海路・陸路あわせて往復約八〇キロの旅路である。

江の島に到着した時、二軒の素晴らしい宿(public house)が閉まっていた。[同行していた]紳士の一人が連れていた日本人の少年の話によれば、それは私たちを追い返すために仕組まれたとのこと。村の役人(village officer)の説明では、最も良い家「宿」が閉まっているのは、主人が麻疹で亡くなったからだということでした。(七月一二日付書簡)

そこで、ブラインは護衛の役人たち(yakunin)に次のように告げた。

私たちはもう到着したのだから、引き返すつもりはなく、今夜はここに止まる「宿泊する」。江戸の政府も私の来訪を知っている。祝祭日であろうとなかろうと知ったことではない、もしそうなら出発前に知らされるべきであった。そして、私たちは人が亡くなったという話は信じない。万一、死者がいるのであれば、私たちは彼の家に敬意を払って入ることはしない。しかし、もしそうでないのなら、私たちは入る。私たちには医者が行っており、彼は遺体を見せなければならない。(七月一二日付書簡)

プラインがこのことを伝えたところ、ものの数分でその宿は開放された。プラインに付けられた役人たちがみずから、扉や窓を開け、それから数分もしないうちに、一行の使用人たちが夕食の準備のために厨房の火を勢いよく焚きつけはじめた。そして星条旗が万歳三唱 (three cheers) とともにバルコニー (二階の張り出し窓か) に掲げられ、翌日プライン一行が発発するまで翻っていた。

プラインたちが泊まった夜は、村の祭り (Omatsuri) の日だった。

しかし何という夜でしょう！ その日は日本のお祭りでした。〔中略〕三時近くまで、ドラム (drums)、つまりトムトム (tom-toms) 〔太鼓〕の音が絶え間なく鳴り響き、四〇匹の猫でもかなわないような〔ひどい〕歌声と、横笛のけたたましい音が響いていました。この間ずっと眠っている者もいれば、むなしく眠ろうとこころみている者もいました。(七月一二日 付書簡)

プラインたちは宿屋の二階の二部屋に泊まった。一つの部屋には四名の女性が、もう一つの部屋には九名の男性が、床に敷いたマット〔敷布団か〕の上に横たわった。しかし、プラインはノミに苦しめられたようで、夜中にすっかり目が覚めてしまった。プラインはユーモアを交え、次のように記す。「確かに認めざるを得ないのは、ノミたちが私たちを温かく歓迎してくれたことです。到着時に私たちを拒絶したあの閉ざされた扉のかわりに、ノミたちが扉を開放してくれた〔口を開放して囁んだ〕おかげで、十分な埋め合わせがな

されたのです」。

プラインはほとんど寝付かれなかったようだが、午前三時に音楽を鳴らしていた村人たちが去っていくのを見送り、四時に起床した。村の通りには色とりどりのランタン (提灯) が光っていた。

翌日、プライン一行は江の島まで歩いて渡り、美しい景色を楽しんだ。そして、プラインはここで興味深い種類の「珊瑚」を購入した。珊瑚は羽根飾りのような形をしており、馬の毛のように細く繊細で、天然の品とは信じがたいものである。日本で科学的調査をおこなっているロシア人将校マックス・シミヴィッチ (Max Simivich) が、それが海から引き上げられるのを見たことがある、と断言したことで、プラインも天然のものとうまく確信するようになったという。

江の島の参道の土産屋 (貝細工店) で販売されていたホッスガイは「ガラス珊瑚」の異名をもち、幕末から明治期に日本を訪れた外国人を魅了した。ガラス細工のような精巧な見た目を持つが、ガラス海綿と呼ばれる生物のひとつである。しかし、ホッスガイの正体は詳らかではなく、一八六〇年代のヨーロッパでは学術的な論争が活発におこなわれていた。そして、一八七〇年代以降、来日した外国人のあいだで江の島のホッスガイに関する研究が本格的になされるようになったという。³³⁾ プラインの記述にあるシミヴィッチの調査については明らかではないが、相当早期のホッスガイ (あるいは類似の生物) の調査と考えられる。

横浜の競馬場

横浜の外国人居留地に競馬場が設けられたことは、すでに先行研

究で知られている。そして、それらは外国居留民の娯楽として、あるいは西洋のスポーツの日本導入の「もののはじめ」として肯定的に描かれることが多い。ところが、プラインは競馬については否定的な意見を持っていた。

プラインは妻への八月二七日付（和暦八月三日）書簡で次のように記している。

現在、外国人たちは横浜に競馬場を持っており、それを恒久的な施設にするための資金集めをしています。昨日「返書の写しには八月二五日付とある」、オランダ領事が私に寄付者リストを送ってきましたが、そこにはフランス公使の名前で一〇〇ドルの記載があり、他にも多くの人々が同額を寄付していました。私は「下記の返事を」送りました。バーティは首を振っていましたが、もし私が意志薄弱にも応じてしまっていたら、横浜で一騒動起きていたことでしょう。「もし寄付をすれば」次のステップとして私を審判員や幹事、あるいは何らかの名譽職に任命しようとしたはずです。「そうなった場合」自分が奨励するもの「〔競馬〕」を、どうして非難することができるでしょうか。（八月二七日付書簡）

プラインはオランダ総領事ファン・ポルスブルック（Dirk de Graeff van Polsbroek）から、横浜に恒久的な競馬場を造作するための寄付を頼まれていた。しかし、プラインはそれを断ったのである。ポルスブルックに送った断りの手紙の文章を、プラインは妻の

手紙に引用している。そのなかで、「イギリスやアメリカでは、多くの善良な人々がこうした娯楽を完全に無害なものと考えていることは承知しております。しかしながら、私の判断では、競馬には必然的に多くの弊害が伴うか、あるいはそこから弊害が生じると考えております。ゆえに、〔自らの信念の〕一貫性を犠牲にしてまで、寄付を行ったり、その他の形で奨励したりすることはできません」（八月二七日付書簡）とその理由を記している。賭け事を快く思わない点については、プロテスタント的な価値観も垣間見える。

一八六二年五月一日・二日に、現在の中華街近辺の円形馬場で競馬会がおこなわれ、さらに秋の競馬会に向けての準備がおこなわれていた。外国領事団はレース運営のためのレース・コミッティ（Yokohama Race Committee）を組織するよう居留民に呼びかけ、六月三日に会議が開かれた。そして八月にはこれを母体に横浜レーシング・クラブが組織される。⁹⁴ プラインがこの手紙を受けたのは、ちょうど同クラブの設立前後ということになる。そして競馬場の設立は、けっして居留民全員が賛意を示していたわけではなかったのである。

四 幕末の諸事件・世相

第二次東禪寺事件と排外感情

第二次東禪寺事件は、一八六二年六月二六日（文久二年五月二九日）に高輪のイギリス公使館東禪寺で発生した外国人襲撃事件である。

犯人は東禅寺の警備を命じられていた信州松本藩（戸田家）の藩士で、徒士の伊藤軍兵衛という二三歳の侍だった。七月七日（和暦六月十一日）、プラインは妻に第二次東禅寺事件について書き送った。プラインはこの事件が本国でも報道されている可能性を考慮し、「私が無事で元氣であることをお伝えしたいからです」と手紙の冒頭に書いている。

イギリス公使オールコックの不在中、代理公使（charge d'affaires）を務めていたニール大佐（Edward St. John Neale, Colonel）は、イギリス人将兵と日本側の警備を受け、イギリス公使館東禅寺に駐在していた。

彼（ニール大佐）は水兵三〇名、一四名の士官と兵士を護衛として引き連れてきていました。これら全ての護衛のほか、五八五名の日本人の護衛がいたにもかかわらず、六月二六日の夜、彼の寝室の扉の近くにいた歩哨（sentinel）が襲撃されました。彼の叫び声は、ニール大佐と、巡回中だった護衛の伍長を目覚めさせました。襲撃者もしくは襲撃者たち（複数人ということは疑わしいのですが）は、ニール大佐を襲おうと思えばきわめて容易にできたはずですが、そのような試みはせず、逃走する途中で出くわした伍長を殺害したのです。負傷した歩哨もその日に死亡しました。現在、イギリス公使館には、以前の三倍近くの数の護衛が配置されています。レナード（Renard）、そしておそらく蒸気軍艦パール（Pearl）ー金曜の夜に江戸に向かいました、からもさらなる護衛兵が上陸

したためです。（七月七日付書簡）

イギリス公使館へのこの二度目の襲撃の原因は何だったのか。プラインはいくつかの可能性を推測している。

一、イギリスやフランスの水兵と兵士たちが上陸し、警護にあたっているという状況を、日本人が快く思っているとは私はいません。ご存じの通り、イギリスもフランスも、あるいは合衆国であっても、自国の都市に外国の警備隊が上陸することなど、どのような理由があろうとも決して許しはしないでしょうから。

二、二種類の護衛兵（幕府の別手組と大名家の警備兵）の間で何らかの争いがあつたのかもしれませんが。ニール大佐はそのようなことは聞いていないと言っています。私は、もしかしたらそうかもしれないと思い、彼に尋ねたのです。しかし、「立石」斧次郎（Onigero）はバーティーに、護衛の一人が数人のイギリス護衛兵に蹴られ、その侮辱に対する復讐を駆り立てられていたと話しました。言い忘れていましたが、襲撃に関与したことが知られているのは日本側の護衛の一人だけでした。彼は翌日、体に銃弾を受けた状態で政府に発見されました。彼は「銃撃で」負傷した後、自ら命を絶つたのです。

三、それ「襲撃事件の日」は、日本の暦と時間の計算方法によれば、一八六一年七月五日〔文久元年五月二八日〕の襲撃事件〔第一次東禅寺事件〕の記念日（一周年）のちょうど翌

日でした。そして、その襲撃で命を落とした者、あるいは後に死刑に処された者の親族の一人か複数人が、その死の復讐を企てた可能性があります。（七月七日付書簡）

三については日本側でも囁かれていた噂であるが、一・二の見方は興味深い。一について、攘夷派浪士を刺激する行動であったことはたしかと思われるが、日本側の感情を示す史料を見出すのは難しい。二の見方について、東禅寺警備で松本藩士が使っていた火縄銃を、イギリス人が幼稚なものとして侮辱したことがあり、これに軍兵衛は我慢ならなかったという。³⁵ 外国公館の外国人が日本側の警備兵を侮辱・愚弄する（ように日本側から見える）行為については他の事例でも確認できる。³⁶ 双方の習慣の違いから生じる行き違いということもあるが、これが幕末期には外国人の殺傷事件となり、大きな外交問題に発展したのである。

ところで、外国人殺傷事件について、外国人側に問題があったとするプラインの意見は、その後に発生した生麦事件（一八六二年九月一四日＝文久二年八月二日）後にも、妻への手紙にあらわれる。

事件の犠牲者の方々に何らかの執拗な非難をするつもりはありませんが、多くの方面で、二度の襲撃〔第二次東禅寺事件と生麦事件〕は、被害者の一部あるいはその関係者の軽率さの結果であるという強い印象が存在することを申し上げるのが適切でしょう。残念ながら、この外国人は日本人を軽蔑する傾向が強く、なかには彼らを脅迫する者もいます。こうし

た傾向はあまりにも強く、聖職者でさえ好戦的になるほどです。（二月一〇日付書簡）

プラインはこう述べたあと、横浜で日本人に対して横暴な振る舞いをするイギリス人の事例を挙げている。そして、そのような行為をおこなうのは、イギリス人とフランス人である、とプラインは考えていた。

フランス人あるいはイギリス人と「日本人との」間で衝突が起きても驚いてはいけません。彼ら〔英仏人〕に対する憤りの感情は高まっていますが、彼らは「その感情を」鎮めることはほとんどせず、むしろ高揚させています。アメリカ人にとつての唯一の危険は、彼ら〔日本人〕が「国籍を」区別できず、偶然あるいは意図せずにアメリカ人を傷つけてしまうこと、あるいは、ごく一部の者の罪や愚行の報いを、外国人全体に負わせるかもしれない、ということです。（二月一〇日付書簡）

プラインは自身、そしてアメリカ人の誠実さを強調することがありますが、いずれにせよ、ヨーロッパ人が日本人の感情に配慮せず、増長した振る舞いをしている、との観察は鋭い視線といえよう。

事件後の安全性と江戸駐在

さて、プラインは、妻を安心させるためもあつてか、事件後のアメリカ公使館と自身の安全さを強調する。その理由はまず、公使館

の防衛体制が増強されたことである。

私は、私自身とアメリカ公使館全員の安全を確信しています。この襲撃の夜、二八四名の将兵が私たちを護衛していました。もちろん全員日本人です。それ以来、副奉行 (Vice Governor) 「外国奉行支配組頭クラスか」が毎晩私の寢室の真向かいの部屋に駐在し、彼「の近く」や、ホール内の他の二か所にも護衛が配置されました。あなたはこれを危険が増大した証拠としてとらえてはいけません。むしろ政府がこのような襲撃の再発を避けたいという強い意志を改めて示す証拠と考えてください。このような襲撃は「再度」起こりそうにありませんが、起こる可能性がないわけではありませんから。

(七月七日付書簡)

またPLAINは、自身やアメリカ人が日本人のあいだで人気があり、さらに日本人護衛との信頼関係があることも、安全性の理由としてあげる。

私たちは皆に人気があり、私たちに危害を加えようとする者は誰もいないだろうと私は考えています。こちらでは、「アメリカ人は大丈夫だ (Americans are all right)」と言われている。護衛たちも私たちが彼らに不信感を持っていないことを知っており、私たちを守る準備ができているだろうと思っています。彼らは忠実であり、こちらの親切を裏切るようなことはしな

いでしよう。(七月七日付書簡)

外国人のなかでアメリカ人については排外的な動きの対象にならなかった、とする日本側の史料は管見の限り見当たらない。もともと、PLAINは幕府高官と接触するなかで、ハリス以来築かれた幕府のアメリカに対する信頼を感じ取り、このような発言につながった可能性はある。

PLAINはまた、日々武装して外出している英仏の公使たちと違って、非武装の自分たちが敵意を向けられたことはない、ということをやや誇らしげに妻に伝える。

イギリスとフランスの公使、書記官 (Secretaries)、武官 (attaches) はそれぞれ自身の護衛を連れて移動しており、全員がベルトにサーベルとリボルバーを携行しています。私たちは毎日街に馬で外出し、「その総距離は」少なくとも五〇〇マイルに達しますが、拳銃や剣、その他のいかなる武器も携行しません。けれども、非友好的な視線を向けられたり、敵対的な言葉を聞いたことはありません。しかし、私はひじょうに慎重です。暗くなつてからは決して外出せず、政府から表明された助言や要望には常に従っています。(七月七日付書簡)

PLAINは「それでは、このイギリス公使館への二度目の襲撃の原因はいったい何だったのでしょうか」と自問自答する。PLAINは「それが単なる外国人への敵意だったとは思いません。なぜなら、

もしそうであれば、デ・ウィット氏（現在江戸訪問中のオランダ公使）[Jan Karel De Wit, 正しくは駐日オランダ総領事]が私自身がねらわれた可能性が高いからです」と推考する。プラインたちには日本人の警護しかついでおらず、「リボルバーを無数に所持している」イギリスよりも警備は手薄だった（七月七日付書簡）。

プラインはみずからやアメリカ人が、イギリス人・フランス人にくらべて日本人と友好的な関係にあり、自分が安全であることを強調しすぎるきらいがある。それはまず、妻に江戸・日本の安全さをアピールする気持ちがあつたからだろう。プラインはジェニーの来日を切望していたのである。そしてまた、イギリス・フランスへのそこはかとなない反感を行間から感じ取ることもできる。

なお、プラインは生麦事件についても、一八六二年九月一日（和暦八月二五日）付書簡で妻に知らせている。しかし、その記述は比較的簡潔で、事件に関して新しい情報は見当たらないため、本稿では紹介を省略する。プラインは生麦事件後も、第二次東禅寺事件の際と同様、「私は江戸ではとても安全に過ごしています。警戒を怠らないため、危険はないと考えています」（九月一八日付書簡）と、みずからの安全を強調するのであった。

ところでプラインは、おもに横浜に居住していた英仏の公使とは違って、危険と思われる江戸に駐在を続けていたことに、一種の誇りを感じていたようである。たとえば、プラインは次のように妻に書いている。

ご存じのように、私は再び江戸に戻っています。数百万の人

口を抱えるこの都市で、外国人の世帯主 (household) は私一人だけです。私はそうなったことを嬉しく思っています。これには、現実には危険はありませんが、世間一般には、ひじょうに大きな危険があると想像されています。（十一月三〇日付書簡）

ハリスもヒュースケン暗殺後に江戸駐在を続けて幕府からの信頼を勝ち取ったことはよく知られているが、プラインも引き続き江戸に駐在を続けたことは、政治外交面からも注目されてよいだろう。横浜に駐在するよりも比較的容易に幕府担当者と交流が可能だったはずで、このことはプラインやアメリカへの信頼を維持することにつながったであろう。

江戸駐在を続ける理由について、プラインにはイギリス・フランスへの対抗心があつたようだが、それ以外に祖国の情勢も関係していた。プラインは「祖国が災厄と試練の時にあるなか」「不名誉で安逸な港〔横浜〕から帰国することになれば、私は恥じ入ることになるはずです」と書いている。アメリカには南北戦争によって、「戦場で手足を奪われた人々」や「国を守るために命を犠牲にした」人々がいた。戦争で混乱した故国の状況を思い、平和な横浜で暮らすことにプラインは抵抗を感じていたのである。また、このような考え方に、安逸に逃げないプロテスタント的な色彩を感じとることも可能だろう。

江戸に留まることをみずからに課し、それを誇りに思っていたプラインにとって、外国公使が「全員」江戸を去った、という「誤報」

は許しがたかったようである。

せめて故郷では私について正義がおこなわれることを望みます。イギリスの新聞は、すべての外国の公使が江戸を去ったと報じています。私が外国人でなければこれは事実ですが、そうでなければ卑劣な中傷です。どうか、故国の新聞がこの中傷を強い言葉で正すようお願いします。(一一月三〇日付書簡)

プラインがいかに江戸駐在にプライドをもっていたのか、ということがよくわかる。

麻疹とコレラの流行

一八六二年は感染症の年であった。幕末期には何度か感染症の流行があったが、この年は麻疹とコレラの流行が同時期に重なったこともあって、多くの死者を出した。³⁷⁾

プラインが感染症の流行を初めて記したのは、八月六日(和暦七月一日)のことである。プラインは「江戸の私たちの使用人たちに麻疹の患者が〔複数人〕おり、江戸ではそれが急速に蔓延しています」と妻に書き送った。

九月二日(和暦八月九日)付書簡では、外国人居留地ではほとんど伝染病が流行っていないこと、それに反して江戸ではふたつの感染症が流行していることを記している。

実際、数日前に英国公使館の一人が言ったように、これほど

健康な国は見たことはありません。ここ〔横浜〕の外国人はほとんど病気になるっておらず、亡くなった住民も宣教師のゴール氏 (Mr. Goble) の子供が真性コレラで亡くなった以外、誰もいません。江戸では今、死者がひじょうに多くなっています。当地の彼ら〔日本人〕はとても不注意です。日本人は熟した果物を食べません。すべて〔未熟な〕緑のうちに摘まれ、麻疹と真性コレラが彼らの間で猛威を振るっています。(九月二日付書簡)

九月一日(和暦八月二六日)付書簡で、プラインは横浜で数件のコレラ患者が発生したことを記した(本手紙の発信地は神奈川県〔Kanagawa〕)。彼が、「そのほとんどが、最近中国から〔入港した〕船舶内におけるもので、中国〔での流行〕はかなり深刻でした」と記すように、コレラはそれが蔓延していた中国からもたらされた。発症から死亡までのスピードはすさまじく、イギリス軍艦リングドヴ (Ringdove) の艦長は、わずか一日の闘病で亡くなった。そして、プラインは江戸における感染症の流行を改めて次のように伝えた。

江戸では病が大規模に流行しています。一ヶ月の間に、その住民のうち一〇万人が死亡したと推定されています。最初は麻疹がひじょうに流行しました。日本では二〇年もの間、麻疹が現われていませんでしたので、当然、大人たちが〔麻疹に〕襲われました。その上、人々が大量の未熟な果物や野菜を摂取し、発病中や治りかけ〔の時期に〕極めて不摂生をおこなっ

たため、この病気による死亡率は恐ろしいものとなりました。

(九月一九日付書簡)

プラインは横浜でコレラの発症例が確認されたこと、さらに、江戸のアメリカ公使館でもコレラが二件発生したことを記している。横浜にいたプラインはシモンズ医師がひろく販売していた調剤一瓶を江戸の通訳のポートマンに送った。翌日、「薬の効果なのかどうかはわからない」が患者の症状は改善した。その結果として、「江戸ではその薬に対する需要がひじょうに高まった」のであった。

横浜・神奈川でのコレラの死者も増加していた。

江戸で実際にコレラの症例があつたかどうかは、もちろん私たちには分かりません。しかし、ここ「横浜・神奈川」では本物の症例がいくつか現れています。私たちの寺「米領事館の本覚寺か」につながっている墓地では、一日に一四もの葬儀が行われる日もありました。数え切れないほどの寺院があり、それぞれの寺ごとに墓地が付属していることを考えれば、「病が」蔓延していったときのその凄まじい死亡率を想像できることでしょう。(九月一九日付書簡)

なお、プラインは流行病を追ひ払う奇妙な風俗を目にしており、それを批判的な目で観察している。

この病による混乱の最中、私は当地「横浜・神奈川」で、何

度か奇妙な出来事を見たり聞いたりする機会がありました。

江戸ではむろん夜間には外出しなかったため、それらを目撃することはなかったのです。病人が出た家の前に群衆が集まり、悪霊を追ひ払うためにトムトム (tom tom) 「太鼓」を打ち鳴らし、歌と偽って呼ばれている、聞くに堪えない騒音を立てているのでした。家々をまわる行列にも遭遇しましたが、やはり同じような騒音を立てていました。これは、いずれも病を治すためのものなのか、あるいは発症前の予防として行われていたのか、私には確実なところはわかりません。しかし、私は哀れな患者たちを気の毒に思いました。その治療法「太鼓の打ち鳴らし」は病気そのものと同じくらい酷いもので、健康な人でさえ病人リストに載せてしまう「病気にしてしまう」のに十分なものでした。(九月一九日付書簡)

プラインは「しかし、最悪の時期は過ぎ去り、今後は普通の病気が蔓延するだけでしょう」と書いているから、この時期(一八六二年九月下旬)には流行の峠は超えていたらしい。文久二年の流行病の様相については研究が少なくないが、その実態を観察した外国人の記録は貴重である。プラインの手紙は幕末の都市社会を活写したものとしてみても特筆すべき史料となっている。

五 軍事―軍艦と訓練

軍艦の受注

プラインの在任期と重なる文久期、幕府が海軍の拡充を指向していたことはよく知られている。³⁹⁾しかし、プラインが幕府から軍艦の発注を受け、それを故郷オルバニーの親族の会社になわしたことは、日本では等閑に付されているようである。⁴⁰⁾

プラインが幕府から軍艦の注文を受注する可能性については、一八六二年八月二八日（文久二年八月四日）の書簡に初めて記されている。

政府が土曜日、私を招待して老中たちと会うことになっているのですが―これは前例のないことです―、その際にアメリカで製造するライフル銃、大砲、そして船舶の注文を私に下さる可能性があります。（八月二八日付書簡）

プラインはこの直後、幕府と兵器および船舶の契約を結び、その船舶建造の差配について、オルバニーのチャールズ・ランシングと、サーロー・ウィード（Thurloe Weed, 一七九七―一八八二）に委託した。チャールズ・ランシングは前述したようにプラインの義兄である。

一〇月二〇日（和暦閏八月二七日）、プラインは「おそらく中国経由でまず郵便にて二〇万ドルを送る予定です。これは水曜日に

この政府から支払われる予定の蒸気スloop軍艦（steam sloops of war）二隻と蒸気砲艦（steam gunboat）一隻の前金です。この注文で数千ドルの利益が得られるでしょう」と妻に書き送った。

そして同じ手紙でプラインはウィードを指名した理由も記している。

ウィード氏を引き入れた理由は、私的・個人的な理由以外にもたくさんあります。彼はスワード長官や「リンカーン」大統領とひじょうに親密かつ秘密裏の関係を持っています。彼は膨大な数の造船業者を知っており、すべてが滞りなく公正に行われるよう、政府に担当官を任命させることもできます。

加えて、彼は手頃な費用で船を調達することを援助することもできるでしょう。もしここで成功すれば、私はさらに多くの船が発注されることになると思います。（一〇月二〇日付書簡）

サーロー・ウィードは、“Albany Evening Journal”を創刊してその経営・編集に携わった新聞人であった。のみならず、ウィードはホイッグ党・共和党の重鎮政治家で、長年大統領の指名に大きな影響力を持ち、国務長官スワードの政治顧問にも任じられていた。

プラインはウィードと「私的・個人的（private and personal）な」関係があり、ウィードの持つ政財界のコネクションを利用して日本への軍艦・兵器売却をおこなおうとしていたのである。そして、仲介をするプライン自身も莫大な手数料を得ることになっていた。

このためプラインは、軍艦売買の利益を大きくすることにも腐心

していた。たとえば、「チャーリーにお伝えいただきたいのですが、もし現在船舶価格が高騰しているのであれば、スループ船の一隻を日本政府向けに急いで建造し、他の船はよりゆつくりと契約を結ぶのが得策でしょう」(二月一四日付書簡) など、造船業の状況をふまえて契約をおこなうことを、チャールズ・ランシングに指示することもあった。⁽⁴⁾

軍事交流―米艦見学と幕府軍事演習の参観

プラインは一八六二年一月二〇日(木曜日)(文久二年九月二九日)付の手紙で、江戸で幕府の高官を米艦に招いて艦内を見学させたこと、さらに、幕府側からの招待をうけ、幕府兵の軍事演習を参観したことを記している。これまでさほど知られている事実ではないが、幕末の比較的早期におこなわれた日米間の軍事交流として注目に値しよう。

プラインは米艦ワイオミング(Wyoming)に乗って江戸に向かった。プラインはこれを「月曜日」とするのみで月日は記さないが、後述する日本側史料などを鑑みると、一月一〇日(和暦九月一日)のことと推測できる。翌日の一月二日、プラインは老中たち(ministers)を艦に招待した。そして一月二日、「三番目の閣僚」(the third Minister)が多くの高官とともに乗船し、その際にワイオミングが一七発の礼砲を放つと、日本の軍艦咸臨丸がこれに応えて礼砲を返した。この閣僚の名をプラインは「Enaba-Shobo Shoyo」と記しているが、これは若年寄稲葉兵部少輔正巳のことであらう。稲葉は文久二年三月に若年寄に任じられ、幕府の軍制改革

を進めた中心人物のひとりである。「日本人たちは艦内のあらゆる場所を訪れ、とても喜んでいた」という。

翌日(二月一四日)和暦九月三日、幕府の砲術・海軍の主要な士官がワイオミングに乗船し、榴弾砲(howitzer)を使用した舟艇訓練と、重砲の配置を視察した。その際、ワイオミングには鶏肉・オレンジ・葡萄などが贈物として届けられた。土曜日(二月一六日)、プラインは老中との公式会談に、マクドゥーガル艦長(Captain David McDougal)と六名の士官、神奈川領事フィッシャーを伴って臨席した。マクドゥーガルには刀一振りと絹織物二反が贈られ、プラインにはある老中への贈物の返礼として、酒一瓶、果物、ペースト状の菓子一箱が贈られた。ちなみに、マクドゥーガルは万延元年(一八六〇)に咸臨丸が渡米した際、サンフランシスコでの修理に尽力した人物である。今回は南北戦争下、南軍を牽制するため北軍ワイオミングの艦長として極東に派遣されたのである。

その次の月曜日(二月一七日)文久二年九月二六日、プラインは幕府の軍事演習に招かれる。プラインによれば、日本の武器を見たり、訓練を見学することを許された外国人はこれまでになかったという。プラインは、マクドゥーガル艦長、フィッシャー、バーティ、キップ、そしてワイオミングの士官四名とともに、「砲術訓練場(artillery ground)」へ向かった。そこは、「広い野原で、高台を越えた先、入り江に面した場所」に位置していた。これは後述するように越中島の幕府の訓練場である。プラインはその敷地の広さを二〇〇エーカーと、フィッシャーは三〇〇エーカーと観察した。現地に到着すると、プライン一行は若年寄(the third Minister)

の稲葉正巳を筆頭に、海軍および砲兵隊の長官、提督、そして一〇〇名近い大身の武士、奉行、高級将校たちに出迎えられた。そして軍隊が登場した。歩兵一個連隊 (a regiment of infantry) 、散兵一個中隊 (a company of skirmishers) 、および六門のボス砲 (Boss guns) を備えた一〇〇名の砲兵隊である。

まず散兵 (skirmishers) として射撃訓練が行われ、ついで野戦砲兵部隊 (field battery) が標的に向かって実弾を、続いて榴弾を撃ち込みました。さらに、単発および小隊 (sections) 単位、そして砲兵隊全体での空砲射撃がありました。続いて中隊 (company) 運動と中隊ごとの射撃訓練が行われ、その後は分隊 (division) ごとく、最後には連隊 (regiment) 全体での射撃へと移りました。彼らの教練は太鼓 (drum) の合図に合わせて行われていました。その行進、射撃、そしてすべての動きは見事なものでした。事実、マクドゥーガル艦長も、またブエナ・ビスタ (Buena Vista) の戦い (一八四七年に発生した米墨戦争の戦いのひとつ) に従軍したフィッシャー大佐も、「これほど見事なものは」見たことがないと言ったほどです。

(二月二〇日付書簡)

その後、アメリカ側が贈った施条一二ポンド砲 (rilled 12 pounds) と滑腔砲を用いた標的への射撃訓練を見学し、ワイオミングの士官も射撃をおこなった。現場にはアメリカの贈物 (兵器) が展示され、日本軍によって製造された施条一二ポンド砲もあった。

施条砲に使用された弾丸も日本製だったという。

この軍事演習の見学について、ブラインは「前例のない恩恵」ととらえ、「他の国籍の人が同じような機会を得るには、多くの年月がかかるかもしれない」と、他国に先んじて幕府の優遇を受けたことを誇ったのである。

幕府は文久二年 (一八六二) のいわゆる文久の改革において、政事総裁職松平春嶽のもと、陸軍・海軍の抜本的な改革に着手する。陸軍は西洋式軍隊にもとづいた三兵 (歩・騎・砲兵) 陸軍の編成が図られ、また、閏八月二〇日には江戸城で全国的な海軍の創設に関する評議もおこなわれた。ブラインの軍事演習見学の背景には、折りしも軍事改革を進めようとする幕府の動向があったのである。

なお、この幕府の軍事演習の見学についても、ブラインはその曜日を「月曜日」とするのみで日時を記さないが、次に掲げる軍艦奉行木村喜毅の日記の記載から、十一月一七日 (和暦九月二六日) のことと確定できる。

九月廿六日 月 晴新霜寒

第八時出局、麟太郎待合同道、陸通越中嶋へ相越、外国奉行御目付等一同同所へ相揃、兵部少殿も無程御越

一亜船将 マアイメン号 マツキツガル并ミニストル其外士官等相越面会いたし候、夫々訓練相始、大砲手続其外伝習有之、亜人并一同へ玉子甘蔗カステラ等被下候 (以下略)⁴³

別離の一年

一八六二年二月三〇日（文久二年一月一〇日）、プラインは江戸のアメリカ公使館で妻に手紙を書いたが、その呼びかけは、“My Precious wife”とふだんとは異なるものであった。

一年前の今日、私はオルバニーを離れ、世界をまたにかけた旅に出発しました。遠い昔のことのように思えますが、まるで昨日のことのようでもあります。「中略」この一年、時は遅々と、ときには苦痛を感じるほど長く感じられました。このように振り返ってみると、結局のところ短い期間でした。

ジェニーと離れて異国に暮らすプラインにとつて、妻と会えない一八六二年はつらい一年となった。本稿ではさほど訳出していないが、プラインは妻に会えない寂しさを書簡に何度も記している。そして、ジェニーとチャリー、スー、そして親族たちへ、明くる年がよい年になるよう祈った。そして、「神の限らない愛によって、私たちが皆健康と幸福のうちに再会すること」を願ったのである。

（謝辞）

プライン文書の調査にあたっては、オルバニー歴史文化研究所学芸員（Curator of History）の W. Douglas McCombs 氏、Director of Education の Erika Sanger 氏にお世話になった（肩書は当時）。ここに謝意を表したい。ニューヨーク州立大学オルバニー校（University at Albany, State University of New York）教授の

Susanna Fessler 氏からは、プライン関係のご論考をいただいた。謝意を表したい。

註

（1）本史料群を利用して、筆者は先に挙げた二文献のほか、吉崎雅規『幕末の横浜を撮った外国人写真家たちーロシエ・ベアト・ウィード』、『特別展 Colorful JAPANー幕末・明治手彩色写真の旅』神戸市立博物館、NHK 神戸放送局、NHK エンタープライズ近畿、毎日新聞社、二〇二四年）、同『幕末期における外国人の遊び・娯楽ー駐日アメリカ公使プラインの手紙からー』（『日本歴史』第九〇八号、二〇二四年）を執筆している。

（2）筆者は前掲「オルバニー歴史文化研究所蔵駐日米公使プライン文書の日本関係資料」でその略歴と資料について解説をおこなっており、本稿の以下の「はじめに」はそれと重複する部分がある。資料群の情報報は二〇〇九年の調査時のものである。

（3）以下プラインの来日前・帰国後の履歴については John V. L. Pruyn, Jr., “A short Biographical Sketch of Hon. Robert H. Pruyn, LL.D., : Late United States Minister to Japan”（オルバニー歴史文化研究所蔵の小冊子）によった。この論考は John V. L. Pruyn, Jr., “Pruyn Family, American Branch.”（*New York Genealogical And Biographical Record* Vol.15-3, 1884）のうぐ、ロバート・H・プラインに関する部分を抜粋・再印刷したものである。

（4）Edwin B. Lee “Robert H. Pruyn in Japan, 1862-1865”（*New York History* 66-No.2, 1985）

（5）*The Albany Directory for the year 1862* (Adams Sampson & Co., 1862) p.230. Albany Public Library 蔵

（6）川崎晴朗『幕末の駐日外交官・領事官』（雄松堂出版、一九八八年）

七〇頁

- (7) Lee, op. cit. なす(5) Jack L. Hammersmith, *Spoilsmen in a "Flowery Fairland": The Development of the U.S. Legation in Japan, 1859-1906* (The Kent State University Press, 1998) p.26.
- (8) 石井孝『増訂明治維新の国際的環境』(吉川弘文館、一九六六年) 一三九頁
- (9) 前同書、一五九頁
- (10) 石井孝が前同書でプラインの外交交渉について肯定的に評価するほか、本橋正「公使ブリュイン在任期の米国の対日政策」(『学習院大学法学部研究年報』八、一九七三年)はプラインの対日政策が基本的に「友好的」であり、「誤りを犯すことが少なかった」と論じる。また、小澤悦夫「リンカーン大統領と日本」(『文化論集』(早稲田商学同政會 二四、二〇〇四年)もプラインの外交を評価する。
- (11) この文書群の概要は“A Guide to the Pryyn Family Papers 1679-1978” (Albany Institute of History and Art, 2007)を参照のこと。
- (12) 二〇〇九年の調査時。なお、書簡以外の史料群については拙稿「オルバーニー歴史文化研究所蔵駐日米公使プライン文書の日本関係資料」を参照されたい。
- (13) “General Records of the Department of State”米国國務省文書, R.G.59)中の“Diplomatic Despatches: Japan”(駐日公使から國務省宛報告, N.A.M.133) アメリカ国立公文書館 (National Archives and Records Administration) 蔵。横浜開港資料館でも複製本での閲覧が可能である。
- (14) Lee, op. cit., Hammersmith, op. cit. なす(5)使用されている。
- (15) Despatches from U.S. Minister to Japan, No.18 May.5, 1862. General Records of the Department of State (R.G.59)の“Diplomatic Despatches:Japan (N.A.M.133). アメリカ国立公文書館 (National Archives and Records Administration) 蔵。横浜開港資料館架蔵の複製本 (Ca4-01.4-15) を利用。
- (16) Ibid.
- (17) 佐野真由子『幕末外交儀礼の研究―欧米外交官たちの将軍拝謁―』(思文閣出版、二〇一六年)
- (18) 前同書、二四七・二四八頁
- (19) 公使館としての善福寺については、港区立港郷土資料館編『江戸の外国公使館』(港区立港郷土資料館、二〇〇五年)、吉崎雅規『幕末江戸と外国人』(同成社、二〇二〇年)を参照のこと。
- (20) 吉崎雅規『江戸の外国公使館』資料解説(『研究紀要』〈港区立港郷土資料館 九、二〇〇七年)
- (21) アメリカ人写真家チャールズ・ウィードが一八六七年に撮影した例がある。「善福寺の庭」(イギリス横浜駐屯軍士官幕末写真帳)横浜開港資料館蔵。横浜開港資料館編『幻の写真家チャールズ・ウィード』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一三年) 六六頁
- (22) 外国公館の警備については、前掲吉崎雅規『幕末江戸と外国人』、同『幕末江戸の外国公館』(港区立港郷土資料館編『江戸の外国公使館』港区立港郷土資料館、二〇〇五年)を参照のこと。
- (23) 御殿山公使館の選定経緯については、吉崎雅規『御殿山外国公使館の選定経緯について』(『品川歴史館紀要』第二四号、二〇〇九年)を参照のこと。
- (24) 御殿山のアメリカ公使館の計画図面(日本側作成)については、港区立港郷土資料館編『江戸の外国公使館』九一頁に画像の紹介がある。
- (25) 肥田喜左衛門『下田の歴史と史跡』(豆州下田郷土資料館、一九八五年) 九四〜九五頁
- (26) 斎藤多喜夫『幕末・明治の横浜―西洋文化事始め』(明石書店、二〇一七年) 一二三頁
- (27) 立石斧次郎のアメリカでの人気ぶりについては、金井圓「トミーという名の日本人」(文一総合出版、一九七九年)が叙述する。また、トミーがアメリカに与えた影響についてはナタリア・ドーアン氏の近刊で論じられる予定とす。 Natalia Doan, *Civil War Samurai: The*

1860 Japanese Embassy and Tateishi Onojiro in Antebellum America
(Leiden University Press, 2026)

- (28) "Distance lends enchantment to the view" (遠くから離れてみると、実際以上によく見える) という格言をブラインが逆に使用したものの (distance does not lend enchantment to the scene)。妻ジェニーはアメリカで悪評もあつたトミーがブラインと同居していることを心配していたようだが、その不安を打ち消すためにブラインが彼の良い面を強調したのである。

- (29) 原資料はブライン文書中の B11-F10 に含まれる。その翻刻は吉崎雅規「オルバニー歴史文化研究所蔵駐日米公使ブライン文書の日本関係資料」一〇七〜一〇八頁を参照のこと。

- (30) ヘボンとアメリカ人宣教師については、横浜プロテスタント史研究会編『横浜開港と宣教師たち』(有隣堂、二〇〇九年)、岡部一興『ヘボン伝』(有隣堂、二〇一三年) などを参照のこと。

- (31) 中武香奈美「幕末維新期の横浜英仏駐屯軍の実態とその影響―イギリス軍を中心に―」(『横浜開港資料館紀要』第二号、一九九四年) 一二頁

- (32) Francis Hall, F. G. Notehelfer ed., *Japan Through American Eyes: The Journal of Francis Hall Kanagawa and Yokohama 1859-1866* (Westview Press, 2001) p301.

- (33) 櫻井文子「江の島土産のホッスガイ―19世紀中頃の海洋生物研究と標本の採取・加工・流通」(『専修大学人文科学研究月報』三三五、二〇一三年)

- (34) 斎藤多喜夫「幕末・明治の横浜」一八三〜一八五頁

- (35) 松本市編『松本市史 第二巻歴史編Ⅱ近世』(松本市、一九九五年) 八一九頁

- (36) 吉崎雅規「幕末江戸と外国人」一一八〜一一九頁

- (37) この年の横浜の感染症の様相については、吉崎雅規「幕末の感染症と横浜―文久二年の麻疹・コレラ」(『開港のひろば』第一四八号、二〇一〇年) も参照されたい。

- (38) たとえば鈴木則子「江戸の流行り病」(吉川弘文館、二〇一二年) など。

- (39) 当該時期の幕府海軍の展開過程については、神谷大介「幕末期軍事技術の基盤形成―砲術・海軍・地域―」(岩田書院、二〇一三年)、同「幕末の海軍―明治維新への航跡」(吉川弘文館、二〇一七年) がくわしい。

- (40) 古くは、Lee, op. cit. がこのことを指摘するが、近年では、次の論文がこの点をくわしく検討する。Susanna Fessler, "Gunboat Diplomacy of a Different Kind: Robert H. Pruyn and Japan's Purchase of U.S. Warships, 1862-1865" (*Journal of American-East Asian Relations* 27, 2020)

- (41) ブライン文書のなかには、チャールズ・ランシングとサーロー・ウィード宛のブライン書簡 (B4-F2) があり、また、ふたりから受信した書簡も残されている (B3-F8・B4-F1)。たとえば一八六二年一月二日付のブライン発信書簡では、外国掛老中と会見した結果、日本側が軍艦に関してどのような要望を持っているのか、といった点を伝えている (B4-F2)。吉崎雅規「オルバニー歴史文化研究所蔵駐日米公使ブライン文書の日本関係資料」

- (42) ブラインはこれを「木曜日」とするが、木曜は一八六二年一月二日 (文久二年九月三日) にあたる。ただし、軍艦奉行木村喜毅の日記によると、和暦九月二日に若年寄稲葉正巳がアメリカ軍艦「マヤメン」を訪れたという記録があるから、この訪問はその西暦にあたる一月二日のことと考える。慶応義塾図書館編『木村撰津守喜毅日記』(塙書房、一九七七年) 九四頁

- (43) 『木村撰津守喜毅日記』九四頁。なお、「外国人外出一件」『旧幕府引継書』(国立国会図書館蔵・請求記号八〇八・二七) 文久二年九月二五日 (項) にも、「明廿六日深川越中島訓練場江重国ミンストル等罷越」とあり、九月二六日、越中島の訓練場にブラインが赴く予定があつたことが確かめられる。

横浜開港資料館紀要

第四〇号

二〇二六年三月三十一日発行

編集——横浜開港資料館

〒231-0021 横浜市中区日本大通3

TEL 〇四五(二〇一)二二〇〇

発行——公益財団法人

横浜市ふさと歴史財団